Kyoto International Festival of Contemporary Culture

PARASOPHIA

Parasophia Conversations 01

21世紀のイメージ・トラフィックの形態論を考える

アレクサンダー・ザルテン×北野圭介

今日、わたしたちの周りのイメージは、光にも似た速度で動きまわっている。多様なスクリーンを、多彩なメディアを、そしてさまざまな大陸を。それらイメージの力は途方もなく巨大なものとなってもいて、わたしたちは日々、己の生といかなる関係を結んでいるのか、死にものぐるいで探りあてようとしている。実際、イメージなるものが、ますます身体そのものを巻きこむまでにわたしたちに働きかけてくるさまを、さまざまな知性がさまざまな立ち位置から、なんとか見定めようと躍起になってもいる。

イメージというものはこれまで、それを表面的なものとして、いわば、シミュレーションの例として、実在する現前の代理物として、捉えられてきた。しかし、世紀が変わった今日、W・J・T・ミッチェルがいうように、イメージなるものは、まるでそれ自体が生命体であるかのように、欲求に突き動かされ、欲望にうがたれ、要求を提示するかのように振る舞っている。そういえばかつて、アンリ・ルフェーブルやレイモンド・ウィリアムズも、イメージをめぐる文章で、そのフローやリズムに注目していた。彼らは、動く映像が、わたしたちの日々の生活を、わたしたちが周囲の世界を受けとめるために作動させる認識の枠組みを、どのように構造化しているのかを考えようとしていたのではなかったか。こういっておいてもいいかもしれない。そうなのだ、イメージは、視覚的な刺激として、と同時に、動き回り持ち運ばれ律動感をもつフローのつくるものとして、わたしたちに働きかけているのではないか。

アレクサンダー・ザルテンと北野圭介がデザインするこのプロジェクトでは、同じ場を共有する観客＝参加者とともに、次のような問いを討論することが企まれている。すなわち、今日、国境をやすやすと越えて移動するイメージのトラフィック（交通）に注目し、それが、わたしたちの世界理解の図式やわたしたちのメディアへの関わり方をいかなる仕方でつくりだしているのかについて問いをめぐり、思考をめぐらすことが企まれているのである。イメージはわたしたちを揺り動かし、巻き込み、わたしたちと触れ合い作用し合う。物理的にも、感情においても、そしていうまでもなく、知的にも。今日のグローバルに展開するイメージの運動は、そうした相互作用のあり方を変えつつあるのか？　世界中をかけめぐり多様なメディアを走破する今日のイメージは、それ自身の生命力をもちはじめている、といった方がよいのだろうか？　わたしたちみんながイメージの制作者であり、操作主であり、発信者であるといわれたりもするが、もしかするとそれは増殖するウィルスの寄生先にわたしたちがなったということなのかもしれない――そこでは、いったいどのような事態が生じているのだろう？ これらが、討論で扱われる問いの一部となる。

こうした問いかけの論点のひとつは、イメージに関わる作成そして発信受信といった作業にいまを生きるわたしたち自身が関与するそのとてつもない度合いをめぐるものであるのかもしれない。その度合いの重みを真摯にうけとめるとき、このプロジェクトは、従来の公開討論のフォーマットの変更を拒むことはできない。観客＝参加者とともにイメージを交換し合うことが、イベント自体のなかへと組み込みこまれる誘惑に抗することができないのである。つまり、このイベントは、イメージをめぐる複数のアフォーダンスが走る環境が出会う、ひとつのミーティング・ポイントになることが目論まれているのである。そうすることでこそ、グローバルな運動性が指し示す多様なパターンについてわたしたちが己の感性を研ぎすますことができるはずだ。

このイベントは、それゆえ、ひとつの遭遇の場として捉えられている。「キュレーション」とは、その語の意味合いが驚くほど拡がり、IT産業から音楽産業までが用いる用語となっている。このプロジェクトでは、イメージをキュレーションするというすぐれて今日的な言い回しそのものが孕むさまざまな問題を扱いたいと願っている。そうすることで、キュレーションという穏やかな言葉から抜け出し、変化や挑戦も含め、すべての参加者からの問いかけに、開かれた遭遇の場であろうと目論むものである。

ここで賭けられているのは、イメージという語が抱え込む曖昧さ―ゆらぎといってもいい―であることも急いでつけくわえておこう。不穏な相貌の可能性であるといってもいいかもしれない。日本語でいう「映像」にせよ、英語でいう「イメージ」にせよ、静止画から動画まで、聴覚像から触覚像まで、心のなかの企てから物質化された意匠までを指し示す。収まりのよい定義を心地よく裏切っていくゆらぎが、この語には孕まれている。キュレーションとイメージ、一見相性がよくみえる二つの言葉が、そのようにして潜在させる、なかば矛盾するなかば衝突する関係性のゆらぎに、このイベントはどこまでも素直であろうと試みるのである。

こうした企みと目論みから、このイベントは、観客＝参加者がイメージを持ち込み、送信し、提示してくれることを依頼し、招き、呼びかけたいと思っている。そうすることで、イメージとその運動そのものが、わたしたちが企てるイベントならではの特別な言葉をしゃべりはじめるだろうと信じているからだ。

自身が示したいと考えるイメージが、誰かがリアクションを起こしたいと鼓舞されるようなイメージが、運び込まれることを願っている。自ら制作したものであれ、どこかから切り貼りされたものであれ、借用されたものであれ、どこかで発見されたもの、すべてが歓迎されることになるだろう。イメージ自体が、問うべき問いを指し示すと確信しているからだ。イメージが自ら語り出すことと、そのイメージについてわたしたちが話すこと、それらがつくりだす緊張感においてこそ、今日のイメージ・トラフィックの力について何ほどかのことを計測することができるのではないか、そうわたしたちは夢見ている。